



おすすめ書籍

Recommended Books

日本の馬

在来馬の過去・現在・未来

著：近藤 誠司

208 頁
定価 4,500 円 (税込)
東京大学出版会 2021 年 10 月刊



●推薦者 浅川 満彦 (酪農学園大学 獣医学群獣医学類)

本誌2021年5月号で同著者による『ウマの動物学第2版』を紹介した。今回は日本産在来馬のうち、「現在でも残っている」品種、すなわち本土系の北海道和種馬、木曾馬、対州馬、野間馬および御崎馬と南西諸島系のトカラ馬、宮古馬および与那国馬について、それぞれの「過去・現在・未来」について解説をしている。「過去」には、古の時代における日本の来歴あるいは近年の西洋馬を用いた品種改良に関わる歴史学・民俗学などのみならず、分子系統を用いた生物科学的な側面からも詳述され、獣医師として知るべき情報に知的好奇心は刺激されよう。しかし、ほぼ全ての品種の「現在・未来」については、概して必ずしも愉快的話ではなく、読後、深刻な懸念が心に残ることになる。そもそも知らなかったら、そのような懸念を抱くことは無かったのだろうに……。

さて、愉快ではない話の1つだが、当然、<チャグチャグ馬コ>で知られる南部馬のような名だたる在来品種が姿を消し、未だに復活していない事実である。この本は、前述したように「レクイエム」ではないので、この名品種の言及はない。しかし、そういった絶滅品種に関してもいくつかの章を設けても良かったのではないかと。もし、この本で不満が残るとしたら、この点である。

偶然であるが、南部馬と紹介者とは、ほんの少しだけ関係している。この品種を育てた南部藩(盛岡藩)領主は甲斐源氏のルーツを持ち、紹介者も山梨県の出身である。したがって、多くの県民同様、甲州騎馬軍団の活躍は幼少時から聞かされた(他の地域はいざ知らず、現代でも武田信玄とその軍団は絶対的

な英雄)。その優秀な馬産出ノウハウは、甲斐源氏のお家芸であったのだろう。東北地方でも生かされ、優れた品種として結実した。しかし、欧米人にとっての在来種は「馬の皮をかぶった野獣」なので、西洋と比肩するために不可欠な軍事規格に合わなかった。そのため、本書でも度々触れられたが、1902年の「馬匹去勢法(当時・馬政局)」が施行された。南部馬もこれにより絶滅したという(p12)。

しかし、本書で取り上げたような「現在でも残っている」品種も存在する。一時は9万頭も誇った南部馬がすべて姿を消してしまったことに、紹介者は違和感を抱いていた。おそらく、この法律施行前に実施された内国勸業博覧会や聯合馬匹共進会などで、体躯の矮小性から南部馬が次々と選から漏れるようなことが続き、当時の生産者は過剰な危機感を持ち、他地域より西洋馬の導入が促進されたことが大きかったのではないかと。すなわち、生産者の「矜持」がこの品種絶滅に手を貸したという説である(例えば、菊池, 2005)。

この真偽はともかく、様々な在来馬が「現在でも残っている」こと自体、奇跡に近い僥倖である。それが今、生産農家の急減と経済活動の激変に晒され、この幸運の賜物も危機的な状況にある。南部馬のような悲劇を繰り返さないためにも、獣医師だけでも、早急に本書を一読され、問題点を共有して欲しい。

【引用文献】

- 1) 菊池 健, 2006 伊能嘉矩の「遼野馬史稿」を読む。(遼野物語研究所 編)「遼野物語」と北の文化, 遼野物語研究所, 遼野市: 109-174.